

10 + 5 = 15



宿題 ひきうけ株式会社

古田足日 = 作
久米宏一 = 絵



古田足日=作
久米宏一=絵



宿題ひきうけ株式会社



1966年初版
1973年愛蔵版初版
NDC 913

8393-11024-8924

理論社
名作の愛蔵版

宿題ひきうけ株式会社

作者 古田足日 ©

画家 久米宏一

制作 小宮山量平

発行 山村光司

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四
電話(二〇三)五七九一(代表)
振替東京九一九五七三六

発行日 一九八〇年九月 第四十三刷



まえがき

もし、きみがニンジンがき
らいだとしても、ニンジンは
たべなければならぬ。でも、
もし宿題がきらいだとしたら、
考えなければならぬ。なぜこ
の世の中に宿題があるのかと
いうことを。そして、ニンジ
ンと宿題はどうちがうかとい
うことも。

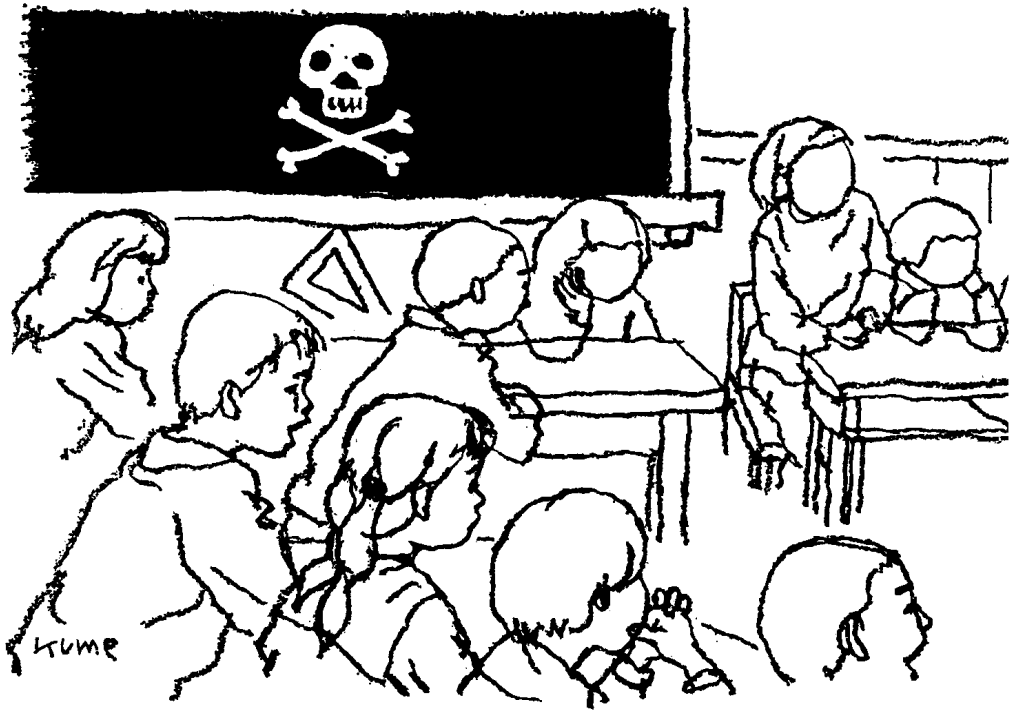


第一章 宿題ひきうけ株式会社……………5

- 1 できたてのニュース 6
- 2 けいやく金一千万円 13
- 3 セールスマン活かつやく 19
- 4 正しいときめるのは…………… 26
- 5 四季しきと宿題はなくなるならない 33
- 6 グリーンランド発見 41
- 7 悪いのはサブローたちだけか 49
- 8 べんしょうはいやだ 57
- 9 解散式かいさんしき 64

第二章 むかしといまと未来……………71

- 10 新学年 72
- 11 「春をつげる鳥」 80
- 12 むかしといまと未来 86



26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
未来からの報告	労働組合	勉強の型	通信ぼ	天国の門前で	優等生にもあやまらせろ	ボスを追放しろ	口をきかない決議	ボス・コウヘイ	新聞部	学校も家庭も地ごとと思え	三つの未来	八千人のギセイ	こわれた夢
190	184	177	169	163	156	148	141	133	126	116	109	101	94

第三章 進めぼくらの海ぞく旗……………125



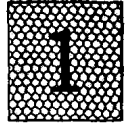
そうてい/さしえ

久米 宏一

第一章

宿題ひきつけ株式会社





できたてのニュース

話はまず宿題しゅくだいひきりけ株式会社がしやのことからはじまる。

この会社は名前どおり、宿題を本人のかわりにやってくれる会社だ。

たとえば、江戸時代えとじだいの交通の地図ちずを書けという宿題がでたとする。それをしらべたり、書いたりするのがめんどうくさいときは、この会社にたのめばよい。夕方までにちゃんとその地図がはいらされてくる。

だから、この会社にたのんでおきさえすれば、おかあさんに、

「きょう、宿題は？ もうやってしまったの？」

と、さいそくされても、

「うん、うん。なかったよ」

といって、テレビを見ておればよい。

なに、そんなべりりな会社がじっさいにあったかつて？

あったとも、サクラ市サクラ小学校（これは仮名だ。ほんとうの名前をいって、もしその学校の先生やPTAのえらい人にわかったら、その会社の人たちはすぐしかられるからね）の五年三組の連中がつくったものだ。社長も子ども、社員も子どもだった。

その社長のところにインタビュ―にいつてみよう。

会社のある場所は、サクラがおか^{だんち}団地六号館の四〇八。四階までのぼっていった右がわの部屋^{へや}だ。だけど、宿題ひきうけ株式会社などというかんばんは出ていない。かわりに村山^{むらやま}正夫^{まさお}というひょうさつが出ています。

「会社のかんばん出したら、おかあさんにうんとしかられるからね。ぼくたち集まって勉強^{べんきょう}しているということになってるんだよ」

と、村山社長はいった。社長は目のくりくりした、まる顔の少年だ。ひょうさつにある村山正夫氏の長男だそうだ。名はタケシ。両親ともつとめているので、この社長は毎日くびからカギをぶらさげて学校へ行っている。

「この会社はね、ぼくたち五年三組の連中がつくったといってもね、全員がやっているわけじゃないよ。社員はぼくのほかに五人。そのうち、ふたりはいま図書館^{としょかん}へ行ってるんだ。のこっている三人を紹介しよう」

すると、テーブルにむかっていた三人のうち、一番小さいのがいきおいよく立ちあがった。

「ぼく村山フリオです。見ならぬ社員です」

「ぼくの弟だよ。うちの会社で、たったひとりの四年生だ」

つぎに髪^{かみ}をかたままでのぼした、美人の女の子がにっこりしながらおじぎをした。

「丘^{かみ}ミツエさんです。うちのうでききのセールスマンですよ」

宿題をやってくれという注文をとって歩く——これが丘ミツエのしごとだそうだ。

「どうぞ、よろしく」

丘ミツエがすわると、つぎにすばしこそうな顔つきの少年が立ちあがった。体からだは小さい。フミオよりちょっと大きいぐらいのものだ。

「ぼくはちびリーダーの大野サブローだ。ニュースならなんでも、ぼくがまずキャッチするから、リーダーというあだ名がついたんだ。ぼくはこのあだ名をほこりに思っているんだ。しごとは調査ちやうさ係がかり。三年生なら三年生にどんな宿題が出たかをしらべるかかりだよ。ぼくでなくちゃ、できないしごとだ。第一、この会社ができるきっかけになったニュースを提供したのは、このぼくだよ」

サブローはどんなニュースを提供し、それがどうして宿題ひきうけ株式会社をつくるきっかけになったのか——。

**

ひと月ばかりの前のこと、タケシのうちに、ヨシヒロとアキコがやってきて、にんじゅつの練習れんじゆつをしていた。にんじゅつの練習といえは、ずいぶんたいへんなことのようにだが、いまこの三人がやっていることは、にんじゅつの第一歩のうちのひとつ——いきをとめることだ。

タケシがまっかな顔をしている。アキコとヨシヒロが、とけいを見ていた。

「四十五秒、六秒……五十秒」



五十五秒でタケシはふうっといきをはいた。

「ああ、くるしい」

「五十五秒じゃ、しかたがないわね」

と、アキコがいう。

「そうだ。まず一分の壁かべに挑戦ちようせんだ。こん

どはぼくがやる」

と、ヨシヒロ。

「じゃ、ふたりでやろう。忍者にんじやはじつさ

いは、たいていふたりに行動したんだよ。

一、二、三！」

ふたりは同時にいきをとめた。

アキコはめざましどけいの秒針びようしんをにら

む。

コッチ、コッチ、コッチ……

とけいの音がいやに大きくアキコの耳にきこえてくる。

——ああ、時間がすぎていつている。

アキコはふつとそう思った。すると、どんどん時間がすぎていくのに、こんな遊びなんかやってちゃいけないんだわという気がしてきて、なんとなく母親にすまないような気持になった。

アキコには父親がいない。母親が家政婦をやり、一番上の兄が会社につとめ、二番めの兄も衣料品屋のすみこみの店員で、夜、定時制の高校に行っている。

「でも、アキコは頭がいいんだから、おれたちがずっと大学まで出してやる。おい。おまえ、キュー夫人みたいになれよ」

と、ふたりの兄がいい、中学二年の姉も

「アキコは勉強してればいいわ。台所しごとなんか、わたしがやるから」といつてくれる。

アキコはじつさい学校の成績はよい。4がひとつあるだけで、あとはぜんぶ5だ。週に二度、学習じゅくへ勉強に行くが、その試験だつて、六年生よりよくできたりする。

「だけど、アキコ。おまえは将来、東大へ行くんだから、もっと勉強しなくちゃだめだぞ」と、一番上の兄はお説教する。

だから、アキコはいまタケシたちのにんじゅつ第一歩につきあっていることが、母や兄たちに悪いような気がするのだ。

——学校の図書室に、もっと本があったらよかったんだわ。そしたら、こんなところでぐずぐず

していないのに。

と、アキコは思う。ろうかをばたばたかけてアキコたちを追いこして行った、シバタ君たちの顔がうかんだ。

きょう、宿題が出た。日本の重要な輸出入品五つずつと、その輸出入先の国の名前をしらべてくる、という問題だ。

教科書に、すこしはのっているが、そんなにくわしくはのっていない。宿題を出した石川先生はいった。

「図書室の少年年鑑や、学習図鑑にのっているよ」

そこで、授業がおわると、アキコとミツエはつれだって、図書室へ行った。そのふたりをシバタ君たち三人のグループが追いこして行った。

シバタ君たちはアキコの前を行っていたタケシとヨシヒロのふたりも追いこして走った。

「あいつ、なんだい。あわててるよ。図書室はにげはしないのに」と、タケシはアキコたちの方をむいて笑った。

だが、これは完全にタケシたちの失敗だった。図書室はにげはしなかったが、本の数はきまっていた。図書の先生はタケシとアキコたちにいったのだ。

「いま、さいごの学習図鑑が出ていったばかりなのよ。あくまで待ちなさい」

「ちえっ。なんでも競争の世の中かあ」

と、タケシがざんねんそうにいつてみせたが、じつはなくてほっとしたというような顔つきだ。

「年鑑がなくて、宿題できなかったといえばいいんだよ。ね、そうだろ、ミツちゃん」

「うん、でもね、宿題はやる方がいいわ。わたし、思いだしたけど、うちのねえさんがおとなの年鑑もってたわ。だから、みんな、どこかで待ってたら、わたしすぐにもってくるわ」

こういうわけで、ミツエがうちに年鑑をとりにかえた。のこりの三人はタケシのうちでミツエを待っている。

でも、ただ待っているのはたいくつだから、にんじゅつ第一歩、いきをとめることの練習がはじまった。

「ふ、ふっ、ふうっ。ああ、くるしい」

ヨシヒロがいきをはきだし、タケシもつづいて大いきをついた。

「ヨシヒロ君五十六秒。タケシ君五十七秒」

「ようし、もうすぐ一分の壁かべをつきやぶるぞ」

と、タケシはにこにこする。ヨシヒロはゆかの上にごろりと横になった。ブザーがジーと鳴った。

「あ、ミツちゃんだな」

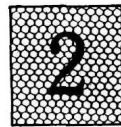
タケシがとんでいつて、ドアをあけた。

「ニュースだ、ニュースだ、ニュースだ。できたのほやほやのニュースだぞ」

ドアの外で、いきをはあはあさせながらそういつたのは、ちびリーダーだった。四階までの階段



を、ひといきにかけあがってきたらしい。



けいやく金一千万円

「なんだ、なんだ。どんなニュースだ？」

「まあ待て。みんなのいるところでいうよ」

サブローはもったいぶったが、じつは一秒でもはやく、そのニュースをみんなに伝えたかったらしい。アキコたちがいる、ダイニングキッチンにはいるなり、サブローはさげんだ。

「テルちゃんがとうとう、プロ野球のスネークスにはいったよ。けいやく金一千万円だつて」

「一千万円！」

タケシもヨシヒロもアキコも目をまるくした。しばらく口もきけない。

またブザーが鳴った。

「タケシくん。年鑑ねんかんもってきたわよ」

「年鑑どころじゃないよ。一千万円だ、一千万円だ」

ヨシヒロがどなったので、ミツエが、ふしぎそうな顔をしてはいつてきた。

「どうしたの？ みんな。へんな顔して」

「うん、テルちゃんが一千万のけいやく金でプロ野球にはいったんだよ」

「まあ、あのテルちゃんが。ショック！」

ミツエはいすの上にべたんとすわりこんだ。

「やになっちゃうなあ。わたしのねえさん、ことし大学出て就職しゅうしょくしたでしょ。月給たったの二万五千元よ」

「そう、テルちゃん、小学校のときから野球ばかりしてすこしも勉強べんきょうしなかったのにな」と、アキコもためいきをついた。

テルちゃんは小学校のとき、いまだ時制ていじせいに行っているアキコの兄の同級生だった。野球はそのころからうまかった。ピッチャーもやるし、ホームランもうつ。だが、勉強はすこしもないで、先生にしかられてばかりいたそうだ。

それが私立しりつのヤエザクラ学園がくえんにはいつて、中学校では四番打者だしや。市や、県の野球大会でヤエザクラ学園チームが優勝ゆうしょうしたのは、テルちゃんのおかげということになった。